有栖川熾仁親王の扁額（有田工業高校所蔵）

江越礼太
（有田小学校所蔵）

教育の改革が急がれている。課題とされるのは、地方自治体の教育関係者が家庭や地域の教育力を掘り起こし、地域独自の学習体制を創造することである。温故知新ということか、そのような時に私たちには最良の手本がある。それは、白川の地に日本最初の陶器工芸学校・勉修学舎を興した江越礼太の先見性である。

焼き物専修学校である勉修学舎が白川に開かれたのは明治14年。文部省が実業補修学校の規程を制定したのは明治27年、実業学校校令を公布したのは同32年。それからしても江越の着想がいかに時代にさきがけたものであったかがわかる。内山克己（当時長崎大学）と松崎朔江（同佐賀大学）両教育学部教授の共著「江越礼太と勉修学舎」による、明治14年度文部省年報の地方所管の専門学校の項に、「農商の学校はなお少なく、特に職工学校のごときは有田で計画されている陶器学校一校だけだ」という記述がある。

勉修学舎の構想は独創的であった。本校と付属小学の2部制として、本校は製陶技術を絵画・成形・焼成に分けて習得させたほか、選択科目に文章、簿記、算数があった。入学資格は小学卒だったが、年齢は不問とし、すでに就職した社会人をも受け入れた。付属小学は画工や陶工を志す子どもたちに製陶技術と普通科目を学ばせた。年少からの窯業教育は、かれらの柔らかい感性と対応力を生かす試みであった。本校・付属小学とも働きながら就学できるようになっており、付属博物館の設置までが計画されていた。

今でいう後継者育成の機関だが、目的の気宇が大きく、設立の趣旨に次のような意味の文言があった。

「かつては欧州の手本とされた有田の製陶技術だが今やそのレベルは落ちた。陶器工芸学校を創設して年少子弟を教育し、大勢の名工を輩出させることが緊急の課題である。それには自信過剰を改め、西洋陶芸の長所にも学ぶべきだ。それによって工芸力を増し、やがて訪れる国際貿易の時代に対処すべきである」

明治はまだ初期。窯業界の資本主義化もいまだし。その時期に一教育者が地域の主産業の将来についてこれだけの提言をした。それは学校を地域から隔離しない教育者だけが持つ問題意識であった。前述の「江越礼太と勉修学舎」はこういう。江越は学校教育を有田全体の一般行政の中に正しく位置づけていた。それも「上から」の強制ではなく「下から」の発想によっていた。模倣でなく独創だった。しかもその具体策がきわめて組織的であり細密であった。江越の見識の偉大さには心からの敬意を表さざるをえない、と。

江越礼太と勉修学舎については「有田町史」の陶業編Ⅰ・Ⅱ、政治社会編Ⅱ、商業編Ⅱ、陶芸編、通史編のほか、中島浩氣「肥前陶磁史考」に記述があります。

それ以上にくわしいのは、本文で紹介した内山、松崎両教授共著の「江越礼太と勉修学舎」で、有田町教育委員会が昭和55年3月に出したものです。

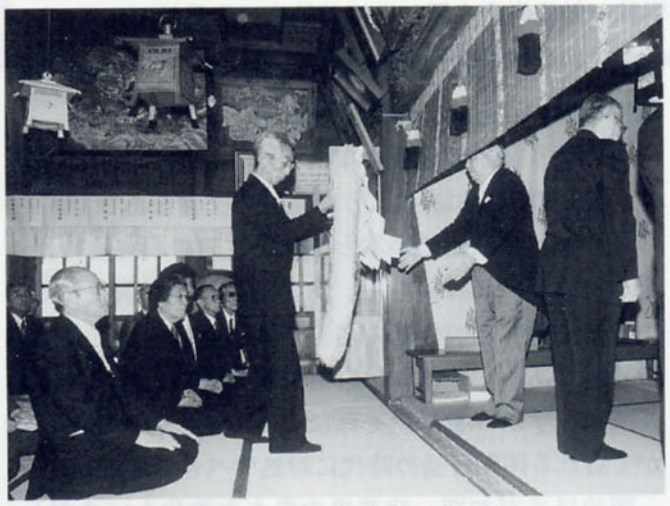
季刊
皿山
冬
No.40
有田町歴史民俗資料館・館報

おくんち点描

～注連元の一年～

有田皿山の宗廟陶山神社の祭礼・おくんちが終わり、神事町をつとめた5区の皆さんは大役を果たされて、ほっとしておられましょう。

ところで、来年はその役目が6区に移ることになりました。ご存じのように神事町は長年かつて内山といわれた旧有田町の5つの区が順番につとめてきました。それが旧外山へ広がるということは、おくんちの長い歴史で初めてのことで、「革命的」とさえいえます。そこで神事町と注連元の1年を追い、おくんちの新しいスタートへの拍手にしようと思います。



陶山神社本殿での注連受渡神事

町なかを行く御神璽と輪注連

輪注連が渡る

平成9年11月23日

凛とした空気がただよう初冬の朝、陶山神社の境内に氏子や祭礼を取りしきる注連元が集まりました。本殿の中で神事が始まり、宮田宮司の祝詞の後4区の旧注連元高野勉さんから氏子総代の山口忠太さんの手を経て新注連元蒲地昭三さんへ輪注連（ワラで作られた直径約1メートルの円形の注連縄で、4本の御弊が下がっている）とご神璽の掛け軸（絹布に陶山大神と書かれたもの）が渡されました。

この後参列者は猿田彦、天鈿女命（あまのうずめのみこと）の矛を持つ人を先頭に、御神璽、輪注連、四神旗（青龍、白虎、朱雀、玄武を描いた4本の旗）の順に並び、中の原の八阪神社へと向かいました。ここでも陶山神社と同様の神事が行われ、注連縄とご神璽の掛け軸（八阪大神と書かれたもの）が渡され、注連元はご神璽と輪注連を自宅の床の間に安置し、翌年の注連あげの日まで毎朝酒や塩を供えて二礼二拍手一礼の参拝を欠かさないようにするのです。

新年を迎えた輪注連

平成10年1月2日

新年を迎えた注連元宅では、いつもの酒と塩に加えて輪注連にも鏡餅を飾りました。この日は初売りと重なり年始客も続く中で賑やかなお正月でした。

新年を迎えた輪注連

踊りの練習

平成10年8月23日
～10月13日

いよいよ祭りの華ともいえる踊りの練習開始です。第1日目は全員揃って有田中学校体育館での合同練習でした。男女各部の踊り子は皿山節に合わせた皿踊りのほかに、道踊り・所望踊りの3曲の振り付けを覚えるために昼間の仕事を終えて、公民館や注連元宅のガレージで師匠の指導のもと踊りの稽古をしました。特に男性は出張をかかえている人も多く、日程を繰りあっての練習は大変です。近年、人口が減っていく中で役員は踊り手を探す苦労もあります。しかし、練習を重ねていく中で、互いにうちとけていき踊りと心が1つになり本番を迎えるのです。

練習を重ねる男子壮年組のみなさん

鬼瓦にかけられた輪注連

平成10年10月12日

この日は朝早くから役員の手により注連元・蒲地家の玄関に注連縄が張られ、宮田宮司による神事が終わると役員の西山弘次さんらは輪注連を手に屋根にあがり鬼瓦にかけました。1年間床の間に安置された輪注連が注連元宅の鬼瓦に掛けられ、町の人々におくんちの幕開けを告げます。

鬼瓦に輪注連がかけられた

泉山大イチョウの下で踊る花組の女性たち

いよいよ当日

平成10年10月16日

14日の衣装揃えで準備も整い、おくんち当日を迎えました。あいにくと朝から雨模様となり、陶山神社本殿でおみこし巡行の出御祭が行われ、おくんちの開幕です。残念ながらおみこし巡行は中止となり、南川原天満宮と外尾町の椎谷神社で雨儀祭典のみが行われました。しかし、このくらいの雨でへこたれる皿山人ではありません。雨が降る、ならば傘をさして踊ろうということになり、当日の朝から片手に傘、もうひとつの手にうちわや皿を持っての猛特訓で所望踊りをやり遂げたのでした。見物の人々からも初めて眼にする風景になかなかの風情だと好評でした。

本来翌17日は皿山祭りとして全町あげてのお祭りの日でしたが、台風接近で中止となりました。しかし、所望踊りは大幅に規模を縮小して行い祭りを終えましたが、11月23日、6区の新注連元川口武彦町長へ輪注連を渡したことで長い神事町の1年も無事終わりました。

何県からが多い？

陶磁美術館と資料館

有田町陶磁美術館と歴史民俗資料館を訪れる人は何県からが多いでしょう――。そうした調査結果はまだありません。いずれ正確な数字を出すとして、とりあえずは、両館の芳名録によってその傾向を見ました。

平成9年度の入場者は、有料無料・団体個人を合わせて陶磁美術館が9286人、資料館が5395人。うち芳名録に署名をした人は陶磁美術館が27％の2547人、資料館が11％の601人。その署名者によって都道府県別のベスト・テンを出してみますと、

◇陶磁美術館

①東京　②福岡　③神奈川　④大阪　⑤兵庫
⑥広島　⑦埼玉　⑧千葉　⑨愛知　⑩北海道

◇歴史民俗資料館

①福岡　②東京　③長崎　④佐賀　⑤愛知
⑥神奈川・熊本　⑧大阪　⑨鹿児島　⑩千葉

（佐賀県は有田高工生など地元の団体を除く）

資料館はベスト・テンの半分が九州関係の県で、常識的に距離に比例しているといえますが、陶磁美術館は違います。2位の福岡県にしても団体客が多い結果ですし、九州関係が意外に少ない。それからして「遠近とは関係ない」といえます。それに首都圏、阪神地区、北海道（札幌）の人が多いことは、地域の経済や文化の水準が数字に現われているともいえます。

有田の場合は資料館も焼き物中心で、両施設の内容が近いわけですが、陶磁美術館は「焼き物の鑑賞者」、資料館は焼き物の歴史や出土品に触れたい「学習者」が中心になっていると見られます。そのような目的の違いがベスト・テンの傾向に反映しているかも知れません。また陶磁美術館の入館者は全都道府県を網羅しているのに対して資料館は6つの県がゼロ。両館の入館者総数の差は、鑑賞者と学習者という違いよりも、町の中心からの距離が大きな原因でしょう。泉山の登り坂を歩いて資料館を訪れるのは少々つらく、美術館だけですませる人が多いとみられます。何とか両施設をつなぐ工夫が必要です。

なお外国人は陶磁美術館が26人。内訳は韓国13、欧米8、中国3、台湾2。これに対して資料館は56人と2倍ですが、全員が韓国の教育関係者でした。ここでも鑑賞と学習という目的の違いがうかがわれます。

好評でした！ 写真展とフイルム上映 新たな写真の寄贈も

当館20周年を記念して10月10日から25日まで開いた写真展「なつかしの有田」は成功でした。大正や昭和初期の生まれの方々を中心に、大勢の方々が家族連れや友達同士で来られ、懐かしそうに見学されました。東京の姉妹を誘われた例があったり、「これにちなむ写真がウチにあるが、再度開けないか」といったご相談も受けました。

18日のフイルム上映会「昭和13年の有田の産業と観光」は311人の来館者で会場となったロビーは満員になりました。急いでクーラーをいれたりしました。一度にこれだけの人が資料館に来られたのは開館以来なかったことです。また、写真展を見られた方から改めて貴重な写真の寄贈がありました。写真展には大正9年10月に実施された第1回国勢調査の有田村（旧東有田町）調査員の記念写真が展示されましたが、これを見られた大野の田代秋子さんから「調査員だった父田代善吾が国からもらった」といって3冊からなる帙入りの貴重な『記念録』を寄贈して頂きました。

なお、資料館は初めてだという方が大勢おられました。それほど縁遠い存在だったのです。みなさんに親しまれる資料館になるよう今後一層努力します。

★完売につき重版

有田在住あるいは有田出身の女性に執筆して頂いて、有田町歴史民俗資料館が刊行しました『有田皿山さんぽ史』は初版の千部を3か月で完売、開館20周年の日に当たる10月10日に第2版（千部）を発行しました。総じて県外の町出身の方々が喜んで下さり、プレゼントなどにお使い頂いているようです。さらなるご講読をお願いします。

季　刊『皿　山』

通巻40号（平成10年12月1日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185